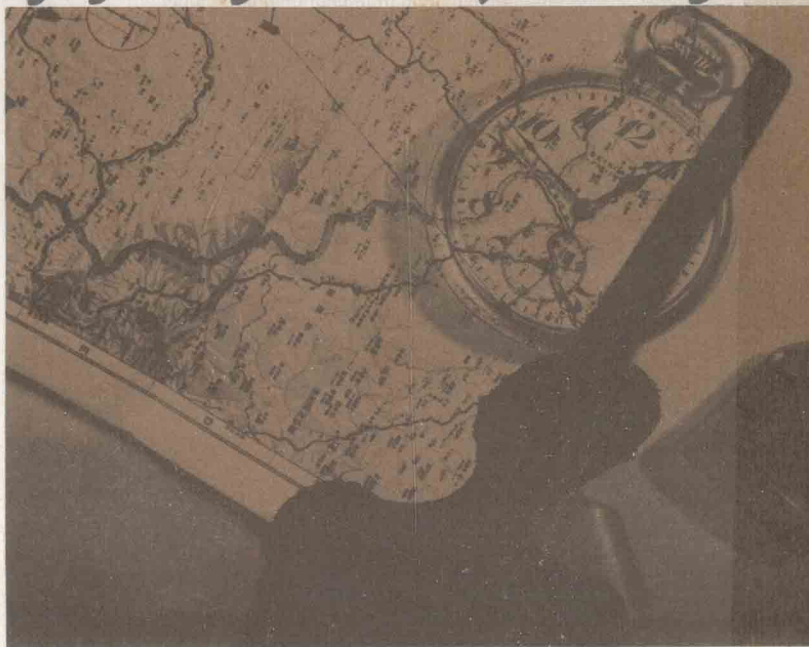


作家の表象



現代作家116

作家の表象



奥野 健男
尾崎 秀樹

時事通信社

作家の表象・現代作家 116

初版発行

昭和五十二年九月五日

二刷発行

昭和五十二年十月一日

定価

一四〇〇円

著者

奥野健男

尾崎

秀樹

発行者

佐藤紀久夫

印刷所

太平印刷社

発行所

時事通信社

東京都千代田区日比谷公園一三三 千一〇〇
電話〇三(五九二)一一一一(代表)
振替東京四一八五〇〇〇

©1977 TAKEO OKUNO, HOTSUKI OZAKI

0095 - - - 3199

落丁・乱丁はおとりかえいたしません。

邦光史郎と瓦石	88	1	阿川弘之と乗り物
倉橋由美子と記号	91	4	安部公房と補助線
黒井千次とビル	94	7	有吉佐和子と流れ
黒岩重吾とトランプ	97	10	生島治郎と運河
源氏鶏太とサラリーマン	100	13	池波正太郎と料理
河野多恵子と貝殻	103	16	石川淳と啖呵
小島信夫と吃音	106	19	石川達三と常識
後藤明生とコンクリート	109	22	石原慎太郎とヨット
小松左京と地図	112	25	五木寛之とトキ
五味康祐と手相	115	28	伊藤桂一と黄土
今東光と放言	118	31	井上ひさしと言葉あそび
近藤啓太郎と海	121	34	井上光晴と炭坑
早乙女貢とモーターボート	124	37	井上靖と家族
佐木隆三と留置場	127	40	井伏鱒二と旅
佐多稲子と素足	130	43	宇野千代と人形遣い
佐藤愛子と負債	133	46	円地文子と巫子
里見淳と極楽とんぼ	136	49	遠藤周作と落第生
佐野洋と折鶴	139	52	大江健三郎と鳥
司馬遼太郎と辺境	142	55	大岡昇平と地形
芝木好子と湯葉	145	58	大藪春彦とGUN
柴田錬三郎と眠り	148	61	小川国夫と街道
島尾敏雄と夢	151	64	尾崎一雄と木登り
庄司薫と薫クン	154	67	海音寺潮五郎と「史記」
庄野潤三と巻ずし	157	70	開高健と飲食
城山三郎と「大義」	160	73	川上宗薫と小児性
杉本苑子と猫	163	76	川口松太郎と語りべ
杉森久英と長唄	166	79	上林暁と庶民
瀬戸内晴美と道	169	82	北杜夫と昆虫
曾野綾子と汽船	172	85	清岡卓行とにセアカシア

藤枝静男と眼科	262	175	武田泰淳と僧侶
藤本義一とひろいもの	265	178	立原正秋と剣
舟橋聖一と女体	268	181	田辺聖子と落語
船山馨と蘆火	271	184	田村泰次郎と兵隊
古井由吉と陰影	274	187	檀一雄と料理
星新一と俳句	277	190	陳舜臣と坂道
堀田善衛と河	280	193	辻邦生と異国
松本清張と時刻表	283	196	筒井康隆と百科辞典
丸谷才一と日本語	286	199	網淵謙錠と一字題
三浦朱門と箱庭	289	202	角田喜久雄と将棋
三浦哲郎と家の血	292	205	津村節子と遊女
水上勉と裏日本	295	208	戸川幸夫と野生動物
三好徹と風塵	298	211	富島健夫と競艇
村上元三と狐狸	301	214	豊田穰と水平線
森茉莉と贅沢貧乏	304	217	永井路子とモーツァルト
森村誠一と虚城	307	220	中上健次と地の血
八切止夫と消火器	310	223	中里恒子と西洋人
安岡章太郎とサル	313	226	中野重治とざる
山岡荘八と空中観音	316	229	中村真一郎とパイプ
山口瞳とご隠居ぶり	319	232	南條範夫と城
山田風太郎と生理学	322	235	新田次郎と富士
結城昌治と肋骨	325	238	丹羽文雄と仏心
横溝正史と読み本	328	241	野坂昭如と唄
吉村昭とペーゴマ	331	244	野間宏と重戦車
吉行淳之介と娼婦	334	247	埴谷雄高と渦状星雲
渡辺淳一とメス	337	250	半村良とシェーカー
和田芳恵とながい道	340	253	平岩弓枝と系図
尾崎秀樹とゾルゲ事件	343	256	深沢七郎とギター
奥野健男と原風景	346	259	福永武彦と冥府

阿川弘之と乗り物



阿川弘之は五十代も半ば、仕事も油がのり、まさに男盛りという感じである。もし官界に入っていたら、ちようど大蔵省の次官とか政界出馬とか、経済界にいれば少社の社長とか専務とかで敏腕をふるっていたに違いない。彼の実務家としての才能は日本文化研究国際会議におけるペンクラブの専務理事としての活躍によっても実証された。

そして彼は無類の遊び好きであり、ゴルフはもちろんのこと、トランプ、花札、麻雀などの賭け事には目がなく、瞬間湯沸かし器などと綽名あだなされるほどかつかと夢中になる。

それには魚のうまい広島出身のためか食いしんぼう、食道楽であり、うまい中華料理を食べるため香港まで出かけたり、子供のためにとったお子様ランチまでうまそうだ、ちよつとよこせと大半食べてしまう。つまりすべてに対し好奇心が旺盛で、活動家であり、一瞬たりともじっとしていることができない。いつもきよときよと頭を動かして、餌をついばんだり、枝から枝へ飛びまわっている鳥のような忙しい男なのだ。

だからぼくにとって最大の不思議は、そのような彼が志賀直哉や広津和郎などの悠然とした老大家に丁重に師事し、しかも老大家から可愛がられる。それはまだわかるとしても、「山本五十六」や「暗い波濤」のような、じっくり調査し、こくのある長篇を書きあげる粘り強さ、気の長さが、あの阿川のどこにひそんでいるのだろうか、いったいどんな恰好で原稿のマス目を一字一字埋めて行く作業に堪えているのであろうか、ぼくには話していても飲んでいても心ここにあらずという体の日常の阿川からは想像もつかない。

どうも阿川にとって小説を書くということは、乗り物を操縦、運転するたのしみ・苦しみと同じことではないかと思われる。忙しく活動的で好奇心にあふれる阿川は、当然無類の乗り物好きである。東大の国文科から海軍の予備学生を志願したのも、どうせ出征させられるのなら、軍艦や飛行機に乗れそうな海軍がよいと考えたためだろう。

もちろんそれより大きく深いのは青春を海軍軍人としてたたかい、多くの戦友が死に、そして日本は敗けた、それはいったい何なのかが、戦後すぐの「霊三題」「年年歳歳」以来の阿川のモチーフである。単なる反戦、厭戦小説ではなく生命を賭けた青年たちの心情を内側から描き、名譽を回復させたい。海軍の訓練を書いた「春の城」、特攻隊員を手記のかたちで書いた「雲の墓標」、そして「山本五十六」、帝国海軍の鎮魂歌とも言える「暗い波濤」と、それは一貫している。しかしその悲痛さの中に、艦に、機に運命を託してたたかう者に対する彼の生理的共感が、阿川文学を生彩あるものになっている。もし阿川が陸軍歩兵や砲兵にとられていたら、彼の小説は全然違ったものになっていたに違

いない。

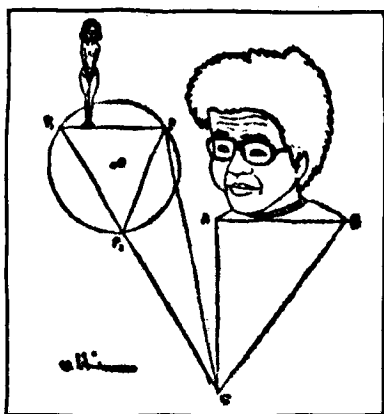
阿川は乗り物ならなんでも目がなない。第一に汽車好きである。新しい特急ができれば、何の用もないけれど乗って終点まで行って引き返す旅行をする。やたらに運転室や車掌室に行きたがり、ニセ車掌になる。もちろん食堂車や駅弁も大好きである。船、飛行機、もちろん大好き。欧州でホバークラフトが開発されれば、それに乗りたいため欧州まで行く。「何のため行ったの?」「ホバークラフトに乗るため」「それに乗ってどこへ行くつもりなの?」「終点まで」「そして何をしたの?」「何もしない」「なぜ乗ったの?」「乗りたかったから」「なぜ?」……

実際、乗り物に乗るだけが目的の旅行を乗り物に無関心の人々に説明することはむづかしい。文学者の中でいちばんはやく免許をとり、ワーゲンを乗りまわしたのも阿川だろう。彼の「お早く御乗車ねがいます」とか「乗り物紳士録」などはいかにもたのしい読み物だ。「あひる飛びなさい」は戦後最初の国産旅客機YS11の実現までを描いた小説だ。ぼくは乗り物への子供のごとき純粹なよろこびこそ阿川文学の原風景、源泉だと思う。

しかし、阿川の一連の海軍ものは少し国家というあやしげな乗り物に無批判に乗っている気配があるのではないか。また家庭生活、夫婦生活をまで「舷燈」という亭主関白の乗り物で操縦しようとする、きしみの音のみ高くなる。ぼくは阿川が、女という、家庭という、そして社会という永遠の乗り物を、落ち着いて乗りまわし、その本質をあきらかにしてくれることを、乗り物マニアのはしくれとして望みたい。

(健)

安部公房と補助線



安部公房は日本よりも海外において有名である。ソ連やチエコスロバキアなどを旅行すると、必ず安部公房のことを言われる。そして安部の友人だというと、ぼくに対する態度まで変わってくる。なにしろ「第四間氷期」はソ連で何十萬部というベストセラーだし、「砂の女」は世界各国に訳され、「友達」はニューヨークで上演されている。来日した作家、ジャーナリストはみな安部公房と会いたがる。

こう書くと国際作家安部は外国語がペラペラであるか誰でも考えるだろうが、実は全く外国語に弱いのである。ぼくは安部が外人に対し、片言でも外国語をしゃべったのを聞いたことがない。彼は外国語は全く駄目だとはじめから宣言し、語学にエネルギーをさくことを意識的に拒否しているようだ。その代わり、学生時代安部は数学の大秀才であった。父が医者なので東大医学部を卒業しているが、ほんとうは数学を専攻したかったらしい。全く日本の文学者には珍しい理数学系型の間人である。

「飛躍が必要なのだ。子供のころ私は幾何学の証明が大好きだった。幾何の問題を解く一番の秘訣は、図型からくる固定観念のわくを破って、意外な補助線を発見することである。柔軟な思考とバネのきいた想像力である。うまく跳躍ができたときのたのしさは、なにものにもかえがたい魅力にあふれたものだった。書き出しが、うまくいったと思つた瞬間の感じは、ちょうどあの感覚だ。」（「マスクの発見」）

『固定観念を破つた意外な補助線の発見』それが安部文学の急所である。もちろんはじめから得意な数学の方法や発想が文学に適用できるとは安部も考えていなかったろう。彼の処女作「終りし道の標べに」は、内向的で観念的で多感な文学青年臭の強いものであった。しかし満州という大陸の植民地で育つた彼は、敗戦時の極限状況を体験し、引揚げ者として日本の風土、社会に対する。なじめない内地を眺めているうちには、彼は今までの日本文学者が、考えていなかった補助線を引くことによつて、全く新しい目で日本を分析し、表現する。芥川賞受賞作の「壁」では、或る朝目をさまざまと名刺や身分証明書から自分の名前がすべて消えている、そういうとき人間はどうなるか。絵を描きさえすれば実在の食物や家になる「魔法のチョコレート」があつたらどうなるか。

『快速船』の万能薬ミュー、「どれい狩り」のウェーという人間そっくりの動物、「デンドロカカリヤ」の植物化する人間、「幽霊はここにいる」の戦死者の幽霊など、現代の社会を根底から揺がす卓抜な補助線である。「幽霊はここにいる」では戦死者の幽霊を信じている復員兵を利用し、幽霊債券、幽霊服のファッションショウ、幽霊会館の建設まで企てる山師があらわれ、ひとつの補助線の設定

が、水面に投げられた石がつくる波紋のように、また坂道を重力の法則で運動する球のように、物理的必然性で、現代の隠れた実情を次々に非情に曝露する。

ぼくは、この意外な補助線が現代の砂を噛むような侘しき、砂漠的人間の放浪性の底にある土着性と合致した「砂の女」は、世界の現代文学の傑作と考える。八分の一ミリの直径の砂が、ある時はさらさらと軽く、ある時はずっしりと重く、人を砂丘の中に閉じこめ、蟻地獄の底の中で毎日砂をかき出し、糧にする生活、これこそ現代人の象徴ではないか。家を欲しがっている男の手足が溶け繭をつくり、男は消滅し「赤い繭」だけ残るかなしき、見知らぬ家族に家を占領され孤独はいけないと連帯を強制される「友達」のおそろしき、化学実験で焼けただれた顔をプラスチックでつくり出し、理想的な顔とは何かの問いに狂う「他人の顔」の迷路、都会の蒸発人間を追跡する「燃え尽きた地図」のむなしき、これらは意外な補助線が見出した現代のむごたらしい姿である。

しかし近作「箱男」はダンボールの箱の中に自分を隠し、カメラの目となつて、都会をさまようという卓抜な補助線の発見にかかわらず、そこからの物理的、力学的な小説の運動がない。最近の安部公房はスタジオをつくり、演劇に夢中だ。彼は今や演劇空間の独裁的支配者として前人未踏の実験を行っている。この三次元空間の絶対支配から、四次元、多次元への時間の流れ、意識されたステイックから意識されたダイナミックへと、再び運動が再開されるとき、安部公房は間違ひなく未来に向かって世界文学のバイオニアになるであらう。

(健)

有吉佐和子と流れ



小学校時代の数年間をジャワのバタビア（現在インドネシアのジャカルタ）で過ごした有吉佐和子は、その間帰国したおりにみた紀ノ川の流れに、鮮烈な印象をうけたという。異郷の地で見える川は小さく、しかも褐色をしていた。それにくらべると日本の川はどこまでも青く、静かで、たつぷりとした流れだった。日本の川はこういう色をしていたのかと、そのときふかく会得したそうである。

彼女はそれから二十年を経た後、「紀ノ川」を書いた。彼女が少女期に川の流れを見たときの感激が、そのモチーフとなったことはあきらかだ。彼女は述べている。

「紀ノ川は、川の名と同じように優雅で品がいい。天竜川や木曾川が見るから男性的であるのにくらべて、紀ノ川は女性であった。青い色と、満々とたたえる水、小波も立てない流れ。しかし水辺に立つと川の音は地の底からわき立つように深く、水量はそのまま水勢で、川辺に住む者を懼れさせていた。これは女だ、という確信を持って私は筆を取り上げた」

川の流れを女として受けとめたとき、有吉佐和子の新しい作家としての第一歩がはじまった。それまでも彼女は「地唄」「美つつい庵主さん」「江口の里」などの佳作を発表し、芥川賞の候補に選ばれたこともある。マスコミは有吉佐和子や曾野綾子の活躍を、才女時代の到来と書きたててもした。しかし有吉佐和子の作家としての自覚が、より内面化するのには、二十八歳のときに書いたこの「紀ノ川」からであり、さらに「有田川」「日高川」と書き継ぐことで、年輪をくわえる。

「紀ノ川」は紀本花を女主人公に、明治・大正・昭和それぞれの時代を生きた女たちの姿を描いた長篇だったが、女性の生きかたを川の流れに象徴させると同時に、時代の動きをもそこに投影させ、歴史にコミットすることに成功している。今日の紀ノ川は青くゆたかな流れというわけにはゆかない。その流れの美しさは、むしろ作者の心象の中に、そして作品に残されているだけかも知れない。彼女は川ものを書き継ぐ過程で、結婚、出産、離婚等を経験し、その苦悩をくぐりぬけて「華岡青洲の妻」を書いた。この作品は姑と嫁の葛藤をあつかっていたが、そこには作者の息づかいにも似たものが感じられた。

彼女は作中で青洲の妹の口を借りて、つぎのようにいわせている。

「……男というのは凄いのやと思いなさらんかのし。……どこの家の女同士の争いも、結局は男一人を養う役に立っているのとは違うんかしらん。考えてみると……男と女というものはこの上ない怖ろしい間柄やのし」

家における女の位置をたしかめようとした有吉佐和子は、家と女性との関係を時間の軸でたどるだ

けでなく、こうして空間の方向へもひろげ、次第に社会的な問題にとり組むようになる。もちろん彼女の社会意識はそれ以前からあり、戦争花嫁をあつかった「非色」をはじめ、「ぶえるとりこ日記」や「海暗」などでも、政治的、社会的諸問題にふれている。そしてその方向は老人問題をクローズ・アップさせた「恍惚の人」に典型的にあらわれている。

しかも「恍惚の人」では、老人対策をひろく訴えるだけでなく、それを家庭の主婦の立場からとりあげたところに、女性作家らしい配慮が感じられた。この作品がベスト・セラーにランクされたのも、家庭の主婦層が身につまされるような要素を多くふくんでいたからだろう。

反戦劇「ケイトンズウイルス事件の九人」を翻訳し、脚色し、演出するなど、行動力に富んだ動きをみせ、さらに選挙や公害問題をとりにこんだキャンペーン小説「複合汚染」を発表した。この作品は新聞小説に新しい形式をもたらした情報小説で、多くの人々に、公害の実態を教え、その自衛手段について考えさせた。その一方で「真砂屋お峰」のような粹な作品もあり、こうした彼女の歩みは、支流から本流へと発展するゆたかな川の流れを思わせるものがある。

(秀)

生島治郎と運河



生島治郎の処女長篇「傷痕の街」は、日本ではじめての本格ハードボイルドだった。それまでも大藪春彦は「野獣死すべし」を書き、河野典生は「殺意という名の家畜」などを発表し、ハードボイルドふうなタッチによる作品の領域をひらいていたが、正統的なハードボイルドの根を日本におろしたのは、この「傷痕の街」からだといえる。

彼はその作品をつぎのように書きおこしている。

「運河は濁っていた。いつも、濁っているのだ。

この河が、澄み切った水をたたえていたのはいつ頃のことか、この底にどんなものが沈んでいるのか、誰も知らない。

ただ、人々はこの運河に船を浮かべ、荷物を運び、塵芥を投げこみ、時には水を汲みあげて顔を洗う。そして、ふと気づいたように、濁った水に顔をしかめるのだ」

この書き出しはいかにも象徴的だ。運河は普通の川とは違い、人工的なもので、さまざまな雑多なものを浮かべながら、ほとんど流れを感じさせず、濁った水をたたえている。

生島治郎は本名小泉太郎、本籍は横浜だが、生まれは上海である。彼の父は十八歳のおり一人で上海に渡り、はだか一貫で運命をきりひらいた「老上海人」だった。

その意味では戦争のどさくさにまぎれて一攫千金をねらった連中とはことなり、一本筋がとおつていたという。その骨の硬さは生島にもみられる。

敗戦の年の二月に上海から引き揚げてきた彼は、長崎、金沢、横浜と転々とし、神奈川県立翠嵐高校を経て早稲田大学英文科に学んだ。創作熱にとりつかれたのは高校一年のときだというから、かなり早い。

彼は「エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン」の創刊以来、その編集に従い、日本の推理小説の興隆に大きく貢献した。

彼が発掘した新人は少なくないのだ。昭和三十八年にその発行元の早川書房を退き、以後筆一本となり、「傷痕の街」を皮切りに「死者だけが血を流す」「黄土の奔流」「悪人専用」を出版、昭和四十二年に刊行した「追いつめる」で第五十七回の直木賞を受賞した。

「傷痕の街」のあとがきで、彼は、

「ハードボイルドの本質は、感傷の世界を描きながら、主人公自身はそれに溺れず、自分の生き方をかたくなに守りつつつけているところにある。

言ってみれば、読者を感傷の世界へ誘いながら、作家や主人公はつねにその世界を冷静にみつめていなければならないはずなのだ」

と書いたことがある。

これは彼のハードボイルド観でもあるが、レイモンド・チャンドラーを好んだ彼は、日本にハードボイルドの作品が容易に根づかないことにゴウを煮やし、みずからその試作品を日本の読者に提供したともいえる。

生島治郎の初期の作品にはグローバルな視点にたつものが少なくない。「黄土の奔流」の主人公は、日中両国の双方に祖国を感じ、同時にそのいずれにたいしても祖国喪失を実感した人物だし、「鉄の棺」には上海を舞台に活躍する日中混血の無国籍テロリストが描かれ、また「死ぬときは独り」では第二次大戦中のマレー戦線を背景に、マレー独立運動に情熱を傾ける男たちの栄光と悲慘が語られていた。

彼の外地ものが迫真力をもつのは、その裏に作者自身の海外体験があるからだ。幼少年期を海外で過ごした彼は、国際都市にうずまきさまさまな底流を、理屈としてでなく感じとったはずである。上海のクリークに浮かぶ汚物や、その悪臭から、彼は何をくみとったか。それが後にハードボイルドの作品として結晶したのではないだろうか。

横浜にも運河は多い。「傷痕の街」の主人公は傷心を抱いて黒い影とたたかうが、生島治郎がハードボイルドに託す思いもまた日本社会の腐敗と文化の荒廃にたいするチャレンジだったのであろう。ノーマン・メーラーの「ザ・ファイト」を訳し、オリエント急行に試乗して「白いパスポート」ほかをまとめるなど、いかにも海外生まれらしい視野のひろがりをしめしているのも彼らしい。(秀)